「性の多様性・生の多様性」再考

早稲田大学　志田哲之

1.関心の所在と目的

社会学において、同性愛者同士が結ぶ関係への関心が表明され、すでに長い月日が経過している。

代表的な研究としてGiddens,A.の『親密性の変容』が挙げられ（Giddens,A.1992=1995）、また関心の多くはパートナーシップ、そして同性婚といったように長期にわたる（あるいはそれが期待される）1対1の関係に焦点が絞られ、「性の多様性」や「生の多様性」のフレーズとともに、パートナーシップや結婚、家族を考察する際に参照されているように見うけられる。

ところが、遡ってみると長期にわたる1対1の関係は、同性愛者同士の関係のバリエーションのひとつにしか過ぎず、過去においてはジェンダー差が指摘され、とりわけゲイ男性においては乱交性が特徴づけられていたり、刹那的な出会いの積み重ねの中に現れる「友情」の探求が議題に挙げられていた（Foucault,M.,1984=1987）。しかしながら、「性の多様性」や「生の多様性」のフレーズとともに示される諸関係の中においては、これらのバリエーションは捨象されてしまうことがほとんどである。

本研究は、この今日ほとんど捨象されてしまった関係を明らかにし、人びとの親密な関係を読み解く別の視点を掘り起こす試みを行い、まだ同時に既存の研究を検討することを目的とする。

2.方法

同性愛者同士で結ばれつつも、捨象されてきた関係についての特徴を確認し、続いて主に90年代以降の同性愛者同士で結ばれる関係の研究／を参照した研究の検討を行う。

3.結果

1990年代に至って同性愛者のカップルは、「新しい家族」のあり方のひとつとして、それまで経験されてきた異性愛カップルや家族に啓示を与える存在として参照され、これらは主に家族研究において見られた。これらにおいてほぼ通底していたのは、同性愛者の1対1のカップル関係が想定・参照され、これをもとに既存の異性愛カップルや家族と関連づけて論じられていた点であった。一方、捨象されてきた関係についての言及や、そこからの参照が考慮されることはほとんどなかった。そして捨象されてきた関係に基づいて、それまで経験されてきた異性愛カップルや家族を検討したときには、齟齬が生じてしまうといえた。

4.結論

以上のような帰結は、今日、先進諸国を中心に見られる、同性婚などの制度化を始めとした関係への承認要求の高まりを鑑みれば、別段不思議なことではないといえる。だが、関係の捨象を行う時点で「性の多様性」は空疎さを孕み、その上でカップルや家族の議論を進める動向には「生の多様性」ではなく、むしろ生き方を収斂させていくのではないかという疑問が生じた。

5.文献

Foucault,M.,1984,”De l'Amitié comme mode de vie”, *Gai Pied Hebdo*, no.126,30juin1984,（=1987,増田一夫訳,「生の様式としての友情について」,『同性愛と生存の美学』,哲学書房）

Giddens,A.,1992,*The Transformation of Intimacy:Sexuality, Love and Eroticism*,Polity Press（＝1995,松尾精文･松川昭子訳,『親密性の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』,而立書房）